流光斎大判役者絵考証

松平　進

流光斎如圭は、大阪ではじめて錦絵の役者絵を作画版行した絵師である。『伝奇作書拾遺上の巻』で、

役者の似顔を画き浮世絵師と唱へるは流光斎より始りしなるべし

と言っているのは、厳密にはその意味である。それまで墨一色摺り絵本の形で役者の立姿や舞台姿を画き版行していたのが、[註1]一枚摺りの錦絵を出すようになったわけである。その上限は、残されている実作品の年代を考証して決定するほかないが、管見の限りでは、寛政三年（一七九一）まではひきあげることができる。今日まで知ることのできた流光斎在名作品及び確実と推定できる作品は次の通りである。

①在原なり平　芳沢いろは　　流光斎（花押）　　㊟

流光斎画　御前試合の場の五役者

（寛政三年十二月、角、競伊勢物語、Osaka Kagami 所収）[註2]

②大森彦七　叶雛助　栗生左衛門　市川団蔵　流光斎（花押）　大左板

（寛政四年十一月、角、人心叶戯場、Allen Art Museum 所蔵）

③（小倉豊前）　市川団蔵　（無款）　大左板

（寛政五年正月、角、勝負革奴道成寺、浮世絵大成九所収）

④（ひがきのおだい）　叶雛助　（無款）　塩リン

（右同狂言、Museum of Fine Art Boston 所蔵）

⑤山田僧都兵衛　浅尾為十郎　流光斎（花押）　（欠）

（右同狂言、Grabhorn Collection 所蔵）

⑥（一色結成守奥方ねさめ　山下金作）　流光斎（花押）　大左板

（寛政五年正月、中、けいせい楊柳桜、Art Institute of Chicago 所蔵）

⑦栄ひだのかみ　山村儀右衛門　流光斎（花押）　塩リン

（右同狂言、Prof. Kühne 所蔵）

⑧淀尾辰五郎　嵐三五郎　流光斎（花押）　塩リン

（けいせい吾妻）　芳沢いろは　流光斎（花押）　塩リン

（右同狂言、右は早稲田大学演劇博物館、左は神奈川県立美術館所蔵）

⑨（あき）つかたてわき　叶雛助　流光斎（花押）　塩リン

（寛政五年二月、角、けいせい睦玉川、上方絵一覧所収）

⑩桃井若狭之介　中山来助　流光斎画　㊙

（寛政五年七月、北新地、太平記忠臣調釈、Kruml 氏報告）

⑪石堂かげゆ　浅尾為十郎　（無款）　塩長板

（寛政五年九月、角、太平記菊水巻、浮世絵大成九所収）

⑫唐木政右衛門　叶雛助　（無款）　（欠）

（寛政五年十一月、角、伊賀越乗掛合羽、池長孟氏旧蔵）

⑬（夕ぎり）　中村のしほ　閻耕　（無款）　塩長板

（伊左衛門）　泉川楯蔵　化龍　（無款）　塩長板／大左板

（寛政五年十一月、角、けいせい阿波鳴戸、右は Victoria & Albert Museum 所蔵、左は塩長板が池田文庫所蔵、大左板が鬼洞文庫所蔵）

⑭桜丸女房八重　吉沢巴紅　流光斎　（欠）

（寛政六年四月、中、菅原伝授手習鑑、個人蔵）

以上いずれも細判で、流光斎在名作品は九点、推定作品は五点である。このほかにすでに諸書に紹介されている通り、在名の大判作品が一点ある。春山武松氏によって「文化四年三月□座？けいせい高砂松？」と一応の考証がなされて以来、私もこれに従って来たが、改めて考えてみたいと思う。

まずこの大判作品は、二種類知られている。一は岡田伊三次郎氏所蔵のもので、春山武松氏の論文「流光斎と松好斎（難波錦絵の研究）」（『東洋美術』十二号、昭和六年七月）で紹介されたもの。私は現物未見である。二は鬼洞文庫所蔵のもので、『上方浮世絵二〇〇年展』（昭和五十年三月～五月、神戸そごう、リッカー美術館、日本経済新聞社主催）に展示、「御前試合の場の五役者」という題で目録十三図にカラー版で収めた。後に『近世大版画壇』（昭和五十八年十月、同朋社）にも載せておいた。ただ一は五人の役者のうち前列の二名の顔を、写真で見る限りでは恐らく筆でなぞって別人にしたてたものと思われる。従って考証に関してはそういう作為のない二を問題にすれば足りると考える。

まず春山氏の推定の通り「けいせい高砂松」とするならば、文化四年正月角座であろうが、流光斎の作画期から考えて遅すぎる。「けいせい高砂松」は台帳を読むこともできず、評判記でこういった場面を発見することもできない。そこで原点にもどって白紙から考証をはじめてみたい。

まず五名の役者であるが、前列右側の刀をふるって穂先を切落している立姿は、浅尾為十郎Ⅰであろう。容貌からも紋からも確かである。その左に膝をつくのは顔に特徴のある市川団蔵Ⅳで三枡の紋である。後方左端の殿様姿は関三十郎（三右衛門）Ⅰで、松の三重ねは彼の紋である。以上三名については間違いないと思う。残る二名がよくわからないが、主要な役割と思われる三名が確実であれば、考証は進めることができる。この三名が同座する場合をさがし出せばよいわけだが、それでは広範になる可能性がある。今少し他の要件で限定できないか。そこで版元に注目したい。亀甲に鬼の字が版元印である。

大阪絵の出版に関しては、蒔田稲城氏『大阪書籍商史』の第十四章「大阪本屋仲間と草双紙屋」、特に第三節「歌舞伎絵及芝居本」が唯一の研究である。蒔田氏によれば、江戸とは異なり、大阪では草双紙屋だけの組合はなく、明治以後にようやく組合が形成された。組合がない時代は、開板に奉行所の許可はいらず、一枚摺絵又は芝居絵などは行司吟味すらなかったという。実際に大阪の役者絵を見ても、原則として極印や改印を画面に見ることがない。[注3] 蒔田氏の研究の基礎となった資料は、大阪府立中之島図書館に二十六種百九十四冊収蔵されていて、『大坂本屋仲間記録』として活字版行されている。草双紙屋に関する記事[注4]がその中に散見する。「出勘帳十二番」の寛政五年八月十三日に次のような役者絵に関する記事がある。

一塩屋長兵衛殿より、役者顔にせ抜摺壱枚摺、大坂屋佐七殿并ニ博労町森田屋卯八、右両人方ニ而出来候ニ付、舞

台扇にわたすみへ差構候趣申被出候故、大佐殿呼寄申渡シ候事

大坂屋と森田屋で版行の一枚摺役者似顔絵が、「舞台扇」「にわたすみ」(註5)に差構があると、塩屋から申出があったので、そこで行事が大坂屋を呼び申渡したという。この件は結局十月まで尾をひくが、塩長の主張が通って独占版行の状態になったと考えられる。前掲の流光斎作品目録を見ると、五年七月まで鬼・大左・塩リンの版行だったのが、九月以降は塩長に一本化される。大左は大坂屋佐七、塩リンは塩屋林兵衛であろう。「出勤帳」にあがる森田屋卯八は管見の限り実作品では確認できない。大坂屋と合版元だったのか独自に版行したのか、「出勤帳」の文面からはわからない。「大左板」の字の上の山形に千鳥の印は、森田屋のものとは考えにくく、やはり森田屋版の絵がたまたま管見に入っていないのだろう。今一つの亀甲に鬼の印の版元が不明である。これが森田屋だと事は簡単だが、その可能性はうすい。たまたま「摂陽奇観」の天明二年に次のような記事を見た。(註6)

浪花松屋町に艸紙屋鬼吉といふもの文七の見へ似面画を初めて世に弘む

この艸紙屋鬼吉がそれなのではないか。もしそうであれば、何故本屋仲間で問題にされ呼び出されなかったのか。先に引いた塩屋長兵衛の訴えに「役者顔にせ抜摺一枚摺」とある。抜摺は、すでに版行されている役者似顔絵本の一部を抜いたようなまぎらわしい一枚摺りを言うのであろう。鬼印の版元から出た役者絵は、「舞台扇」「にわたすみ」の図柄と抵触しないと見られたのであろうか。

いずれにせよ、この訴え以後しばらく塩長の独占が続く。前掲の目録③泉川橋蔵の絵は、鬼洞文庫のものは大佐板、池田文庫のは塩長板であるが、これも大佐から出たものが先で、後に塩長に何らかの手続があって移され、改めて版行されたと見られる。こういった事情から考えると、塩長版行でないこの流光斎大判の刊行年次は、寛政五年の夏以前と目やすをつけていいのではなかろうか。上限はとりあえず今日まで管見に入ったもっとも早い流光斎作品の寛政三年としてみる。このあたりで、市川団蔵・浅尾為十郎・関三十郎の同座している時をしらべると次の通りであり、座も角座に定着している。上演外題をあわせてあげてみよう。

寛政三年―八月「響灘入船噺」、九月「いろは仮名四十七訓」、十一月「けいせい忍術池」、十二月「競伊勢物語」

寛政四年―二月「埋礎花大樹」、三月「色競続箭戦」(花大樹の後編)、五月「会稽富士俤」、八月「義経千本桜」、九

月『忠考昔二街』、十一月『祇園祭礼信仰記』
寛政五年一一月『勝負革奴道成寺』、二月『けいせい睦玉川』
（このあと団蔵上京）

まず評判記の記載から、この図についての手がかりをつかむことができないか。もし評判記に出てくるのなら、台帳を一つ一つ当るより早いことは間違いない。それらしい評判記の記述が出たら、台帳での確認がしやすい。まず寛政四年正月刊『役者名所図会』の団蔵、為十郎、三十郎の項には、それらしい記述が出て来ない。次に五年正月刊『役者当振舞』を見ると、浅尾為十郎の項に次のような部分があるのにぶつかった。四年二月角座の『瓦礫花大樹』の役を評した部分である。為十郎はこの時実悪之部の首座で大上上吉の位付けである。

さじき……二の替の山口九郎次郎はこしらへといひ鎧の場などはきついものであった。頭取長刀丸の役も大切にせ検校となり市紅丈との出合の所はずんどかるふなされて一しほ面白い事でござりました

文中に一回出てくる「鎧の場」というのは、可能性がある。市川団蔵の項には出ないか。団蔵を見ると、この時立役の部一番手で大上上吉である。

頭取……二の替三の替ともましば久よしの役はる永鷹がりの場ひやうたんざけの場も小きみよく行届かし山口とやりの場も見物にたんのうさせ……

ここにも「やりの場」が出る。関三十郎はこの時関三右衛門の名で立役之部五番手上上吉だが、三月、八月、九月などの短評があるだけで二月の役には全く言及がない。

右の評判記の記事を確認するために、番付を先に見ておく。所見の役割番付寛政四年二月角座によると、三人の役々は左の通りである。

市川　団蔵—このした東吉、浅井ながまさ
浅尾為十郎—まつ永ちやうどう丸、やつこりん平、山口九郎次郎
関三十郎—小田のぶなが、やつこしど平、りやうし平さく

団蔵の東吉（久よし）、為十郎の山口九郎次郎、三十郎ののぶなが（はる永）と完全に符合する。役割番付だけでなく、絵本番付も見て、これに似た図柄が出てくればさらに確かめられるが、所見の絵本番付ではこれに似た図が見あたらない。

「瓦礫花大樹（のいしはなだいじゅ）（このした）」の台帳は池田文庫に所蔵されている。外題は「花大樹」、四冊で初演台帳の写しであることは配役から明らかである。この台帳の三ツ目「小田家広間の場」に次のような書き部分がある。

ト団蔵為十郎か肩へさして片手にてもゝ立を取為十郎いらつて突かけるを団蔵鍋をはねのけ直に持ている長鍋を取て両人本手の鍋仕合いろ〳〵有てトゞ団蔵為十郎か鍋を巻落し直につきかゝるを為十郎刀をぬきちよと立廻り有て団蔵か鍋のほさきを切かゝる是にて見へよく両人きつと留る

なお、『瓦礫花大樹』は、日本戯曲全集三四巻『太閤記狂言集』に活字翻刻されている。絵入根本の『瓦礫花大樹』（春梅斎北英画）を底本としたものと思われるが、この絵入根本はずっと遅く天保六年（一八三五）の刊行である。内容も一部異るが、このト書き部分に関しては異同はほとんどない。いずれにせよ、流光斎大判は、台帳のこの部分を画いた絵であると確言していいであろう。

台帳によるとこの場面では二重舞台上には、関三十郎のほかに四人の近習が座ることになっている。四人はいずれも台帳の上で役者名は記されず、○△□などで処理されている端役である。この四人のうち二人がたまたま画かれているのであろうが、この二人を知ることはまず無理である。容貌は特徴のある似顔で画かれているが、他に比較する確実な似顔がないからである。しかしこの考証が、この二人によって覆るということはない。

註1　流光斎は錦絵版行以前に、天明四年『且生言語箇』、寛政二年『画本行潦』を版行している。

註2　OSAKA KAGAMI, Jan Van Doesburg 編、一九八五年、Huys Den Esch

註3　例外は芦川彦国作品と英泉斎国直作品である。彦国作品は十一点見たがすべてに極印一つがある。国直作品は所見二点に同じく極印がある。極印の有無は版元とは無関係である。恐らく江戸絵に似せた絵師の戯れと解してよかろう。

註4　大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第一巻。

註5　ここでいう『舞台扇』は、安永七年京都の菊屋喜兵衛の求版『絵本続舞台扇』を指すと思われる。『にわたすみ』は流光斎『画本行潦』。

註6　『浪速叢書』第四、三六七頁。

〔付記〕　本稿は昭和六一年十月八日 New York Ukiyo-e Society での講演 The Identification of Osaka Prints を日本語に直し、少々加筆したものである。